Incarnation
インカーネーション

知っておきたいキリスト教のことば （96）

受肉 じゅにく

「受肉」という言葉は、あまり聞きなれないものです。文字通りに読むと「肉を受ける」ということです。キリスト教ではイエス・キリストが肉体を受け、人間となったことを「受肉」と言います。

ユダヤ教やキリスト教などでは、霊と肉とをはっきりと分けて考えていました。創世記で神さまは人間を創るときに、鼻から息を吹き込みます。肉（肉体）に、霊である息が吹き込まれたのです。

さてパウロは、肉は罪の象徴であるといいます。受肉とは、神の子であるイエス様が、その罪の象徴である肉を持たれたという教理です。神さまは人間の歴史に介入するために、三位一体の第二位格であるイエス様をわたしたちの間に与えられます。その理由を聖書はこのように伝えます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）

イエス様は、神さまがわたしたちを愛するが故に、わたしたち人間の間に顕し示された方です。そのイエス様を救い主と告白し、受け入れることが、キリスト教の基本なのです。

それではイエス様は、神さまなのでしょうか。人間なのでしょうか。この議論は、初期キリスト教の時代から活発になされてきました。教理上では、一つの結論が出されています。

それによると、イエス様は完全な神性を持つと同時に、完全な人性も持つそうです。頭で考えても、どういうことかよくわかりませんが、わたしたちにとって大切なことは、「神の子であるイエス様が人間になられた。だから人間であるわたしたちの痛みや苦しみを、すべて理解してくださるのだ」ということなのではないでしょうか。

次回は「主の祈り」です。お楽しみに。

「森の聖母」
フラ・フィリッポ・リッピ
（1406～1469 年）

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

（ヨハネによる福音書 1 章 14 節）